

不本意入学した女子学生の事例

鶴田 一郎

(広島国際大学心理科学部臨床心理学科)

【要旨】

本研究では、不本意入学した女子学生の事例を提示し、その学生相談過程を真に検討していくことを通して、学生相談における「不本意入学」学生への支援の方法について考察した。

その結果、有効な援助となるためには次のことが重要であることがわかった。①クライアントが自分という存在に気づくこと(自己覚醒)、②クライアントが自身を受け容れること(自己受容)、③クライアントが自分としてどう生きるかを選択すること(自己決定)、④クライアントが、その生き方に自分自身のあり方、生きる意味を見出し、自分の人生をより創造的に生きていくこと(自己実現)、である。

そしてカウンセラーは以上の①～④のことにクライアントが志向できるように、場合によってはカウンセラー自らの「自己開示」を含めた援助をする試みが有効な場合もあることが示唆された。

1. はじめに一問題の所在

本人が第一志望として入学したのではなく、何らかの事情で第二第三志望の大学に不本意ながらも入学する学生がいる。このような学生は大学生活に不満や不全感を感じやすく、中には中途退学や進路変更を行なう学生もいる(松原 1999, pp.451-452)。ただし、第二第三志望の大学であっても入学後、その領域に興味を持ち、やる気を発揮する学生もいる。逆に第一志望の大学に入学しても自分が抱いていた理想と、現実の学生生活のギャップに悩み、不登校や中途退学に至るケースもある(鳥山 2006, pp.18-38)。

一方、特に女子学生では「本人が浪人したいと望んでも親がそれを許可してくれなかったり、自分がやりたい専攻課程がある大学が遠く離れた場所にあり、自宅から通わせたいと望む親に受験させてもらえなかった」(佐々木 2002, p.178)という場合もある。このような女子学生に特化された不本意入学の事例もある。

本研究では、上のテーマを考えていく第一歩として、不本意入学した女子学生の事例を提示し、その学生相談過程を具に検討していくことを通して、学生相談における「不本意入学」学生への支援の方法について考察したい。

2. 事例の概要

学 生：B子さん、女子、来所時 18 歳、文系学部 1 年生。

相談内容：本当は第一志望であった他大学の理系学部に進学したかった。また、今の大学で所属している文系学部は何の興味も持てない。

来談経緯：保健室を経由した自主来談。

家族構成：父(会社員)・母(会社員)。兄(23歳・フリーター)・B子さんの四大家族。

本人の生活形態：アパートでの一人暮らし。

初回の本人の印象：表情も明るく、笑顔で、話していることもわかりやすい。痩せ型で背は普通、姿勢もよく、身なりもきちんとしている。ただし、話が一方的になる傾向があった。

3. 面接の経過

面接は原則週一回(約50分)とした。初回は4月中旬で、前・後期制の大学なので、来所した時期は、前期のはじめ、入学直後に当たる。全体として約四ヶ月の間に10回の面接を行なった。

以下、B子さんおよびその他の人の言葉を「」、カウンセラーをCo、Coの言葉を<>で記す。

第1回(X年4月中旬)

B子さんは入室して挨拶が済むなり、すぐに次のように一方的に話し始めた。「今の所属している文系学部は不本意入学だ。第三希望ですらなかった。滑り止めというわけでもなく、たまたま時間が空いていたので受験した。本来の志望は、ある別の大学の理系学部。今の大学の理系学部も受けたが不合格だった。自分(B子さん)は浪人して受け直すつもりだったが、両親から『女の子でもあるから浪人はしないでほしい』と言われ、仕方なくこの大学に入学した。

両親は共働き。父は『～すべきだ』が多く、今までの私(B子さん)の進路も一方的に決められてきた。一方、母は優しく自分(B子さん)の話をよく聴いてくれるが、進路に関しては父に全面的に賛成してきた。小さい頃の記憶はないが、小学校から高校まで、いわゆる『鍵っ子』で、両親からはほっておかれた感じが強い。家族は他には5歳上の兄がいるが、小学校までこの兄の『使い走り』をさせられていた。中学で兄に反抗して、今は没交渉。この兄は高校卒業後、定職にも就かず、ブラブラしていて、家に自分の借金を押し付けたりしている。この兄とは会いたくない。

入学式前日からアパートでの一人暮らしを始めた。第一志望の他大学に入学した友人がいるが、サークル活動など他大学は楽しそうだ。高校の3学期(B子さんは現役合格なので数ヶ月前のこと)、不安定になり、不登校になった。精神科を受診し、うつ傾向を指摘され、投薬も受けた。幸いに薬が効いて、精神科は3回通院して終わった。ただ、卒業式当日に幽霊部員だったあるクラブを『よくがんばった』と担任が大きく勘違いして皆の前で強調して褒めた。これは自分にとって大変ショックなことで、これをきっかけにパニック状態になり、大声を上げて泣きながら廊下を走ってしまった。このことを知る高校の同級生が今の大学の他学部におり、絶対顔をあわせたくない。

その一方で、入学後、学部内に気の合う友人が数名できた。これらの人と話ができるので、大学に来ること自体は嫌ではない。しかし、全般にやる気が起こらない。下宿で一人の時、うつ的になる。また、授業が始まる時に胃がキリリと痛む。この間、Coは話を傾聴。B子さんは、にこやかにそして明瞭な口調で話し続けた。

第2回(X年4月下旬)

入室するなり、B子さんは「頭もフワフワ、身体もフワフワ、浮かんでいる感じ。大学も勉強もどうでも良い」と明るい笑顔で話した。しかし、前回話された高校の卒業式のパニックのことをCoが

尋ねると、急に下を向き涙を流し始めた。しばらくしてB子さんが落ち着いたので、Co<今後、無理な質問はしないよ。また、話したくないことは話さなくてもよい>と言うと、安心して笑顔で話し始めた。卒業式のパニックについては「一番質問されたくない、しゃべりたくないことだった」とB子さんは話す。

第3回(X年5月上旬)

B子さん「大学の授業に興味もてない。来週から引きこもるかも」と言う。Co<えっ、引きこもる？>。B子さん「引きこもりと言っても食事や普通の生活はするが、学校には来ないという意味」と答える。続けて、高校時代、友人(女性)がリストカットをしていて、その友人と自殺の方法についてよく話していた。今ではその友人も、B子さんが入学を希望していたある大学に入学している、という。B子さんは「その友人を羨ましいとは思わない」と言いながらも、顔はとても悔しそうだった。また、最近、特定の友人を除いて、その他の学生とつきあおうとしないB子さんを心配して、担任の先生(B子さんの大学には担任制度がある)から、「君、何か悩んでいることあるの。僕に言ってみなさい」と言われたが、何も言う気になれず、父にどことなく似ているこの担任に心の中で「うるさい。ほっといてくれ」と叫んだ。

第4回(X年5月上旬)

電話をしたら嫌いな兄が実家に戻っていた。B子さん「不快なので連休も実家には帰らない」。続けて家族の話「兄は論外だとしても、父も母も自分(B子さん)を理解してくれない」。最近のB子さんは学校には来るが授業には出ない状態が続いていた。

第5回(X年5月下旬)

B子さん「二週間ほとんど家(下宿)にいた。家ではファミコンばかりして、外に買い物に行く気にもなれなかった。夜寝つきが悪く、夜中の3時頃やっとうつらうつらしてくるが、気づくと朝の7時ごろで、そうなるともう眠れない。学校には気晴らしのため一回だけ来たが、結局つまらないのですぐ帰った」。

続けて、週末に実家に帰って進路の話題になったことを話す。B子さんによれば、母からは「せっかく入れたんだから4年間で卒業しなさい」と言われた。B子さんから見れば母は「家族の中で一番まじめ、また自分(B子さん)とよく話をしてくれる」という。一方、父からは「何か別の目標があるなら今の大学をやめてもよい。何かあるのか?」と詰問され、本当はあるのだが反射的に「ない」とB子さんは答えてしまった。父は「それじゃ、だめじゃないか。やめてどうするのか?」と更にB子さんを問い詰めたが、B子さんは「寝る」とだけ言い残して自分の部屋に戻った。B子さんから見れば父は「一応はまじめな人なのだが、話をしたくないタイプの人間だ」という。上のように話したB子さんだったが、この後、二週間に一度くらいの割合で実家に帰っている。

Co<ところで、B子さんは本当は何がしたいの?>。B子さん(はっきりと迷いなく)「福祉機器の開発です。障害がある人を援助する機器、特にコンピューター関係、例えば音声読み取りソフトの開発などがしたい」。続けて「自分(B子さん)は新しい環境に慣れるまで時間がかかる。高校入学の時もそうだった」と語る。Co<気休めでなく、それはそれでよいのじゃないかな。B子さんはB子さんのままで>と言うと、B子さんは嬉しそうに微笑んだ。

第6回(X年6月上旬)

前回の面接で、Coから「あなたはあなたのままでよい」と言われ、気持ちが落ち着いたのだが、その後、親しくしている大学の友人の一人が休学願いを出したことを知り、「再び不安定になった」とB子さんが話し出す。そして「自分も退学したい」と再び考え始めた、という。続けて、B子さんは「ただ、なんだかやる気が出ない。今はやりたいこと(福祉機器の開発の勉強)を頭に思い浮かべることができる。でも、それを実際、今の大学をやめて新しい大学を受け直し、進路変更するという行動に結びつけることができない。大学を受け直すという目標を高らかに掲げたいが、新しい大学に受かる感じがしない。そして何もできずに腐っていくような気がする」と話す。Co「腐っていく?」。B子さん「そうです。文字通り腐っていく。身も心も。家にばかりいるせいでしょうか。このような考えばかりが浮かぶ。私はおかしいのでしょうか」。Co「おかしいかどうかはわからないが、休養が必要だと思う。週末ゆっくりご両親と話し合ったらどうだろうか」。B子さん「わかりました。そうします」。

第7回(X年6月中旬)

前回の言葉どおり B子さんは週末実家に帰り両親とじっくり話してきたという。B子さんの話「どうせ週末は実家に帰る予定にしていたので、そのまま実家に帰った。なかなか今後のことを話し始めることができなかつたが、父から誘われ近くの河川敷で何気ない話をした。そうすると、徐々に気持ちが落ち着いてきて、帰宅した後で、母に素直に大学を受け直す希望があることを告げることができた。また大学入学後、様々な悩みに襲われていたことも両親に話した。両親はわかってくれた。しばらく実家で静養することも両親に勧められたが、一旦アパートに戻ろうと思い、今日、面接室に来ました」。Coは両親と和解し始めたB子さんの姿を嬉しく思うと同時に、大学を受け直す準備を今後支援することをB子さんと話し合う。

第8回(X年6月下旬)

この回はB子さんに求められて次のようにCoの今までの人生過程について自己開示(self disclosure)した。

「私(Co)は1962年、福岡県で出生。家族は、父・母・姉・私(Co)の四人。その後、父親の転勤により、各所を転々とする。小学校4年の時、両親が千葉に住宅を購入、その後、高校時代まで、その家で過ごす。中学から高校時代は姉の問題で常に母親が振り回されていたが、父親は単身赴任で不在であったため、父親不在の母子家庭という感じであった。私は、家庭のこととはなるべくかわらないようにして、山登りやクラブ活動に無理矢理熱中し、このことを忘れようとしていた。

思春期青年期は、勉強もせず、山登りに熱中した。大学時代にもクラブに入り、より高い山、難しいルートを目指した。勉強や学問で力を発揮できないと思っていた私は、その反動からか登山に過剰にのめり込んでいった。そして、長い間の運動部経験から、弱肉強食・優勝劣敗・強者の論理を身につけてしまった。友人を蹴落としてでも自分が高い山、難しいルートを目指したかった。しかし、大学3年生の時に滑落事故に遭い、登山には二度と行けない身体になったばかりか、リハビリテーションにその後3年ほどかかった。それまで大学の講義に出たのは一度か二度であり、卒業は望めないということで、事故から一年後に大学は自主退学する。

大学にも行かず、毎日、リハビリテーションに病院に通うか、コーヒー(自分でブレンドして)を飲むか、音楽(ジャズ)を聴くかの日々であった。登山家になるという夢が破れた『生きる屍』・同級生が次々と就職を決めていく中であって自活する気力がない世捨て人と自分を蔑んでいた。また、この時期、山登りの仲間が相次いで遭難死したことも、心を落ち込ませる結果となった。自分など生きていく価値がないのではないかと思いつめ、自殺を図ろうとしたこともある。

22才になり、偶然に山岳部OBの誘いがあり、西サモア(現・サモア独立国)のODA(政府開発援助)の建設プロジェクトで2年働くことになる。西サモアの人々は、タロイモやヤムイモ、ブレッド・フルーツ(パンの実)などを主食とし、基本は自給自足で、環境と調和して家族や親戚と仲良く、ゆったりと生活していた。自然環境も赤道直下とは思えぬほど、年間平均気温が30度と過ごしやすかった。ただ日中の炎天下の元では体感温度70度を超えることもあったが、その反面、夜間は20度前後になり、寝苦しい夜は皆無だった。自分がその中で生活していることは、自覚的ではなかったが、大いなる自然に包まれて、自然と一体化したようなゆっくりとした時であった。

サモアの人々も私に友好的にやさしく接してくれた。日本にいる時に悩んでいたことは夢のようだった。『このまま、死ぬまで西サモアで生きていけたら、これほど幸福なことはない』と心の中で思っていた。しかし、滞在1年が過ぎたころより、この夢のような生活にどっぷり漬かっている自分に不安を感じ始めた。なぜなら『一生サモアで生活しても自分はサモア人にはなれない、あくまでも自分は日本人なのだ』と思い始めたからである。日本の国を離れると、日本という国を対象化して客観的に考えることができる。そこには悪い面も多々ありながらも、自分のルーツがある。そう思い始めて、段々と帰国の準備を始めた。夢の世界・非現実の世界に呑み込まれることから、私を現実の世界に引き戻させてくれた出来事だった。

24才で帰国後、西サモアで縁ができたある専門学校に就職することになる。登山や西サモアでの経験が校長にかわれてのことである。その専門学校は、当初は非行・高校中退者・発達障害児など行き場のない生徒を受け入れていたが、時代状況に連動して、中学での校内暴力の加害者・被害者、不登校・引きこもり・家庭内暴力、いじめの加害者・被害者、援助交際の女子高生といった生徒を受け入れていくようになった。そこでは、当初、教員として採用されたが、むしろ授業や学校教育をどう行っていくかよりも、いかに生徒たちと付き合っていくかが主たる課題になっており、その必要性から『心理学』や『教育学』を学んでいった。

特にその学校の非常勤講師であったA先生のお導きにより、精神分析の世界を体験することになった。A先生は日本の精神分析の黎明期に精神分析を学んだ方で、ご主人も精神分析を学んだ精神科医であった。週2,3回学校に訪れるA先生には、精神分析の視点からの生徒理解の方法や生徒との接し方の工夫の教授を受けた。また、A先生の紹介により、ユング派の精神分析家であるC先生の研究所を訪れ、その研究所で『教育分析』を受けていくことになった。学校での職務は、心理アセスメント、臨床心理学的面接、臨床心理学的地域援助、調査研究など、ほとんどが心理臨床活動になっていった。カウンセラーが24才から25才位までの間は、驚くほどクライアントが好転し、『自分はカウンセラーという仕事に向いているのではないか』と内心已惚れていた。

しかし、25・26才位から陰りが見えてきた。二十歳まで生きられるか分からない病気を抱えて自

暴自棄になっていたクライアントや、知的発達障害もあった重度の自閉症の女の子とその母親の面接が、一向に進展しないばかりか、後退しているように感じ始めたからである。人間の生死、重度の障害を負いながら生きていくこと、そのような人間にとって根源的問題について何も考えていなかった自分を振り返ることもせず、表面的な成功体験から自我肥大を起し、自分はカウンセラーに向いているなどと己惚れていた自分を大きく反省し、更に過剰に反省しすぎてカウンセラーを辞めようかとまで思っていた。

この後、カウンセラーは27才-28才頃の対人恐怖、27才の時の過敏性腸症候群などの症状に悩まされ、自ら患者体験・クライアント体験を余儀なくされた。これらの体験はカウンセラーの中の患者元型(イメージ)の意識化につながった。そして、そのカウンセラーの一人の人間としての影の部分の自覚が、更にクライアントとのかかわりを通して、卑小な自分・弱い自分であっても、そのありのままを認め受け容れていくことが、逆説的に強い自分、つまりは生きる勇気への気づき(アウェアネス)につながる事が分かった。また、自らの体験からも問題解決や症状除去は、そのアウェアネスの過程から生じることがカウンセラーに実感された。

この間、放送大学で学びながら、昼間は実際の面接とA先生のスーパービジョン、夜は教育分析やカウンセリング研修会、放送大学の面接授業に通った。カウンセリング研修会では、それまで疎遠であった行動療法的カウンセリング、人間学的カウンセリングの理論と技法について学ぶことができた。特に前者は、発達障害児の心理臨床を行う上で大きな参考となった。後者は、特に来談者中心療法の『クライアントへの無条件の肯定的配慮』という考えに惹かれたが、それ以上に提唱者のC.R.ロジャーズその人の生き方に共鳴を覚えた。この後、33歳で大学院修士課程(教育学専攻)に入学、間主観カウンセリングの提唱者伊藤隆二教授に教を享ける。自分が行ってきた心理臨床の実践が伊藤先生の考えに近いものだを知った。なお、この同時期(修士課程入学時・33才)、職場もある地域の教育研究所に移った。

教育研究所での教育相談員(心理)の仕事(この後3年間)は正に心理臨床という感じがしたが、障害児の就学相談などの仕事での矛盾も感じ始めていた。クライアントとかかわりながら、自分としてありのままに自分なりに生きていくことに気づき始めていたからである。

そして、35才でカウンセラーはある地方の大学の教員となり赴任した。そして現在に至っている。この間、カウンセラーは、心理学やカウンセリング、臨床心理学を学生に教えながら、学内の学生相談委員を務め、学外では成人対象の職員相談、地域におけるスクール・カウンセラー事業のお手伝いなどもさせていただいている。どうにかカウンセラーとしての職務を果たしていこうと考えているが、家庭生活とも相俟って一進一退を繰り返している状態である。しかし、顔だけは俯かず前を向いていられるのは、それは言うまでもなく、これまで出会ってきたクライアントの人たちのお陰である。

以上のCoの自己開示をB子さんはただ黙って聴いてくれた。

第9回(X年7月上旬)・第10回(X年7月中旬)

B子さんは更に両親と話し合い、実家から大学に通うことにする。この後の面接は再受験に向けての情報提供とアドバイスが主だったところになったが、それを通じてのB子さんの精神的成長

は目覚しく、不安はあるものの、今の大学は前期(7月)までで退学し、夏から予備校に通い、再受験に備えるということを両親の了承を得ながら自己決定した。そして7月中旬の最後の面接(第10回)では、B子さんと共に今までの面接過程を振り返り、B子さん自身が、この間の「悩みの時」を「自分にとって必要な思索の時」であったと意味づけることができた。そして、面接を終了することに二人で決めた。

4. 考察

筆者は、キャリア・ガイダンスを含む「カウンセリング」の特長について、次のような見解を持っている。それは、すなわち、カウンセリングとは、クライアントが、自分という存在に気づき(自己覚醒)、それを受け容れ(自己受容)、自分としてどう生きるかを選択し(自己決定)、その生き方に自分自身のあり方、生きる意味を見出し、自分の人生をより創造的に生きていく(自己実現)ことを援助するプロセスである、というものである。以下、この視点から、本事例を考察する。

自己覚醒(self-awareness)とは、自分という存在に目覚めて、どう生きるかを自覚する作用である。B子さんの場合、この自己覚醒の契機となったのが、大学への不本意入学であった。人は人生の途上であって、壁にぶつかって初めて、立ち止まって、自分の「今まで」と「これから」について考える。それは性別や年齢を問わない。

B子さんの場合、第一志望は大学理系学部だったのに、両親の「女の子なので浪人させたくない」などの意見をいれ、不本意ながら文系学部に入學した。ここには「自分というもの」がない。敢えて言うならば「自分がないという自分」があった。それは自分という存在に目覚めていなかったからだが、Coとの面接過程を通じて、B子さんは自己に目覚めて行かれた。

一方、自己受容(self-acceptance)とは、文字通り、自分のありのままを受け容れることである。B子さんは当初、自己受容の状態にはなかった。この自己受容のためには、まず自分自身を振り返ることが必要だが、具体的には、他者とのかかわりの中で自分を再発見するというプロセスが必要であろう。

B子さんにとっての一番身近な他者とは、言うまでもなく、両親、特に母親であろう。B子さんの発言にもあるように、B子さんの母親はB子さんの話を聴いてくれる優しい母親である。しかし、ひとたび進路決定などのことになると、「～すべきだ」が口癖の父親を全面的に支持してしまう、ある意味、弱い母親でもある。

B子さんの両親は共働きで、B子さんはいわゆる「鍵っ子」であった。それゆえ、両親からは、「ほって置かれた」という意識がB子さんには強かった。5歳上の兄も模範にはならず、両親に、どのように自己主張していくかもわからず、心理的に^{ほうこう}彷徨した状態のB子さんの思春期であった。

それが面接の第5回を過ぎる頃より、B子さんに変化が現れる。曲がりなりにも、両親と話し、自分の気持ちを伝えようとしている。また、Coからの問いに「自分は福祉機器の開発の勉強がしたい」とはっきりと表明できている。しかし、それまでかなりの心身のエネルギーを消費していたB子さんは、第6回で「見も心も腐っていきそう」と悲鳴を上げる。Coは実家での休養を勧める。

そして第7回では実家に戻り、両親とよく話しあったことが語られた。それは、感情的行き違い

があった今までのことを和解したこと、これから大学を再受験する希望があることを両親が認めてくれたことなどである。さらに第8回ではB子さんに求められてCoのこれまでの人生について自己開示(self-disclosure)した。この自己開示は、B子さんに求められたからであるが、Co側の密かな願いとして、この自己開示により、B子さんが「自身のことを振り返ってほしい」「自分の生き方の参考にしてほしい」ということがあった。

上のことに、直接言葉にしてB子さんが答えてくれることはなかったが、その後の行動によって十分に表明してくれた。つまり、B子さんにとっての重要な他者である両親を受け容れることは、同時に、自己を受け容れることにつながり、その後どうしていくかという方向性もB子さんに見えてきた。自分のありのままを両親に受け容れられたことが、大きな勇気となり、B子さんの自己受容が進み、両親と話し合いながら、一步一步、再受験の方向で動いていかれたB子さんであった。このように、ただ自分勝手に自分の人生を決めていくのが自己決定(self-determination)ではなく、周りの重要な他者とのかかわりを大事にしなが、さらに自分で自分の方向性を決めていくのが自己決定なのである。

それでは何故、この自己決定がB子さんには阻まれていたのだろうか。次のような理由からだろう。B子さんは、進路決定の重要な時期である高校3年生の3学期の時期に父母の支えや自らの耐性が不十分で、心理的不安定となり、不登校になった。卒業式のパニック状態も、この延長線上にある。端的に言えば、「心の支え」がB子さんにはなかったのである。そこには「自分がする」という意識が薄れ、「させられている」という感情が前面に押し出されていた。また、大学入学後は「高校時代の友人たちは、皆、自分の志望校に合格しており、自分だけが不本意な学生生活を送っている」という状態のB子さんであったからであろう。

このように「自分だけが取り残されている」「自分は自己決定できず、させられている」という意識があったB子さんは、到底、自己実現(self-realization)のプロセスを歩んでいるとは言えなかった。しかし、Coとの面接を契機として、自分なりに、自分として、自分の人生を、周りの人とかかわりながら、自分で創造していくことにB子さんは目覚めて行かれたのである。つまり、B子さんは自己実現のプロセスへと参入していかれたのである。

5. おわりに—まとめにかえて—

本研究では、不本意入学した女子学生(B子さん)の事例を提示し、その学生相談過程を^{つぎ}真に検討していくことを通して、学生相談における「不本意入学」学生への支援の方法について考察した。その結果、有効な援助となるためには次のことが重要であることがわかった。①クライアントが自分という存在に気づくこと(自己覚醒)、②クライアントが自身を受け容れること(自己受容)、③クライアントが自分としてどう生きるかを選択すること(自己決定)、④クライアントが、その生き方に自分自身のあり方、生きる意味を見出し、自分の人生をより創造的に生きていくこと(自己実現)、である。そしてカウンセラーは以上の①～④のことにクライアントが志向できるように、場合によってはカウンセラー自らの「自己開示」を含めた援助をする必要がある、とまとめられる。

引用・参考文献

- 松原達哉(1999)「不本意就学」恩田彰・伊藤隆二(編)『臨床心理学辞典』八千代出版、pp.451-452。
- 佐々木正宏(2002)「ケース1 不本意入学とその背後にあったもの」鈴木乙史・佐々木正宏・吉村順子(編)『女子大生がカウンセリングを求めるとき——こころのキャンパスガイド』ミネルヴァ書房、pp.177-190。
- 鳥山平三(2006)「不本意入学」鳥山平三『キャンパスのカウンセリング——相談事例から見た現代の青年期心性と壮年期心性』風間書房、pp.18-38。

謝辞

本論文発表を快諾していただきましたB子さんに心より御礼申し上げます。

付記

本稿の基礎には筆者の師である伊藤隆二先生(横浜市立大学名誉教授)による次の二つの著作があります。本稿など遥かに超えた深い省察が、そこにはあります。是非ご一読されることをお勧めします。付記して感謝申し上げます。

- 1) 伊藤隆二(1998)『「心の教育」とカウンセリング』大日本図書。
- 2) 伊藤隆二(2003)『間主観カウンセリング—「どう生きるか」を主題に一』駿河台出版社。